

千葉市感染症発生動向調査情報

2024年 第38週 (9/16-9/22) の発生は？

1 定点報告対象疾患(五類感染症)

報告のあった定点数	定点	38週	37週	36週	35週	
上段: 患者数 下段: 定点当たりの報告数 「定点当たりの報告数」とは 報告数/報告定点数	小児科	18	18	18	18	
	眼科	5	5	5	5	
	*インフル/COVID	27	28	28	28	*正式名称は インフルエンザ/COVID-19定点
	基幹	1	1	1	1	

定点	感染症名	千葉市						千葉県
		注意報	9/16-9/22	9/9-9/15	9/2-9/8	8/26-9/1	9/9-9/15	
			38週	37週	36週	35週	37週	
小児科	RSウイルス感染症		0	1	1	0	21	
	咽頭結膜熱		1	0	2	4	20	
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	↓↓	27	44	37	24	352	
	感染性胃腸炎	↓↓	54	84	85	70	496	
	水痘		1	1	2	1	18	
	手足口病	★★○	193	175	150	111	961	
	伝染性紅斑		1	3	15	3	35	
	突発性発しん		6	5	8	10	30	
	ヘルパンギーナ	↓↓	13	27	23	17	108	
	流行性耳下腺炎		1	1	2	1	10	
*インフル/COVID	インフルエンザ (高病原性鳥インフルエンザを除く)		8	6	8	5	108	
	新型コロナウイルス感染症	↓↓	89	132	153	138	1,512	
眼科	急性出血性結膜炎		0	0	0	0	0	
	流行性角結膜炎		1	2	0	1	18	
基幹	クラミジア肺炎 (オウム病を除く)		0	0	0	0	0	
	細菌性髄膜炎 (髄膜炎菌性髄膜炎を除く)		0	0	0	0	0	
	マイコプラズマ肺炎		0	2	0	0	11	
	無菌性髄膜炎		0	1	1	1	1	
	感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)		0	0	0	0	0	

★★: 流行中 ★: やや流行中 ◎: 増加 ○: やや増加 →: 変化なし ↓: やや減少 ↓↓: 減少

「流行中」 流行発生警報開始基準値以上

「やや流行中」 流行発生注意報基準値以上、又は流行発生警報開始基準値を下回った後に流行発生警報終息基準値以上

2 全数報告対象疾患: 6 例

病名	性	年齢層	診断(検査)方法	病名	性	年齢層	診断(検査)方法
結核	男性	60歳代	病原体の検出	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	女性	70歳代	細菌の分離・同定、 薬剤耐性の確認 及び起因菌の判定
	男性	70歳代	IGRA検査				
腸管出血性 大腸菌感染症	男性	40歳代	病原体の検出及び ベロ毒素の確認	梅毒	女性	30歳代	血清抗体の検出
					男性	70歳代	

・第38週は、結核2例(117)、腸管出血性大腸菌感染症1例(14)、カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症1例(15)、梅毒2例(54)の発生届があった。

※ ()内は2024年の累積件数。但し、累積件数は速報値であり、データが随時訂正されるため変化します。

定点当たり報告数 第38週のコメント

<A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

前週より減少し1.50となった。過去10年の同時期と比べると多めで、年齢階級別の報告数は4歳、7歳及び8歳が多かった。区別では、稲毛区(4.33)からの報告が最多で7歳の報告が最も多かった。

<感染性胃腸炎>

前週より減少し3.00となった。過去10年の同時期と比べるとほぼ平均レベルで、年齢階級別の報告数は1歳及び5歳が最多。区別では、若葉区(9.00)からの報告が最多で1歳の報告が最も多かった。

<手足口病>

前週よりやや増加し10.72となった。流行発生警報開始基準値(5.0)を上回ったままで過去10年の同時期と比べると最多のまま。年齢階級別の報告数は1歳が最多。区別では、稲毛区(18.67)が流行発生警報開始基準値を上回り最多で5歳の報告が最も多かった。他に緑区(16.00)、若葉区(12.50)、花見川区(10.33)及び中央区(6.67)が流行発生警報開始基準値を上回った。

<新型コロナウイルス感染症>

前週より減少し3.30となった。年齢階級別の報告数は40歳代が最多。区別では、美浜区(5.00)からの報告が最多で10-14歳の報告が最も多かった。

■ 「過去10年との比較グラフ」及び「区別の発生グラフ」はWebSiteでご覧いただけます。

・ 過去10年との比較グラフ

<https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/iryoeisei/khoken/kkagaku/idsc/documents/graph2024.pdf>

・ 区別の発生グラフ

https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/iryoeisei/khoken/kkagaku/idsc/documents/graph_ward2024.pdf

■ トピック ■

<手足口病>

定点当たり報告数は、第35週に再び流行発生警報開始基準値(5.0)を上回った後も増加し続けており、第36週から過去10年の同時期と比べて最多の状態が続いています。感染経路は主として糞口感染を含む接触感染と飛沫感染です。感染者との濃厚な接触を避け、また、回復後にもウイルスの排出がしばらく持続することがあるため、手指の消毒の励行と排泄物の適正な処理、またタオル、ハンカチや遊具(おもちゃ等)を共有しない等の感染予防対策が大事です。また、口腔内病変の疼痛による拒食や哺乳障害から生じる脱水、合併症等による重症化に注意することが重要です。

<結核>

厚生労働省は、毎年9月24日から9月30日までを「結核予防週間」として、結核に関する正しい知識の普及啓発を行ってきました。令和6年度からは、同期間を「結核・呼吸器感染症予防週間」として、結核に合わせて、呼吸器感染症が例年流行する秋冬前に、マスク着用を含む咳エチケット、手洗い、換気等の基本的感染対策や予防接種の重要性等、呼吸器感染症に関する知識の普及啓発を行っています。

結核は、患者数および罹患率(人口あたりの新登録結核患者数)は順調に減少しているものの、今でも年間1万人以上の新しい患者が発生し、1,500人以上が命を落としている日本の主要な感染症です。

2024年第37週時点の全国の届出累積数は10,787例で、過去10年の同時期(平均14,214.3)と比べると2023年(9,937例)、2022年(10,346例)に次いで少なくなっています。都道府県別では東京都(1,513例)が最も多く、次いで大阪府(853例)、神奈川県(716例)の順となっています。千葉県は628例であり、全国において6番目の多さとなっています。

千葉市の結核の届出数は、2019年(167例)から2023年(116例)まで減少傾向となっていました。2024年は第38週時点で117例となっており、過去5年の同時期と比べると平均(106.0)より多くなっています(図1)。

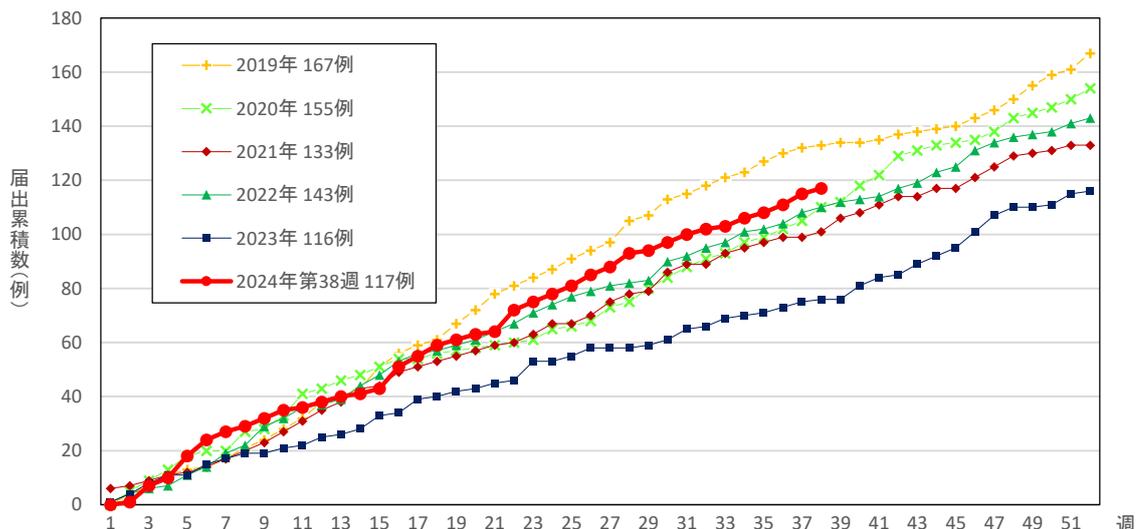


図1 年別届出累積数(2019年第1週-2024年第38週 n=831)

117例中、男性66例(56.4%)、女性51例(43.6%)で、年代別では50歳代(22例、18.8%)が最も多く、次いで20歳代(19例、16.2%)、80歳代(18例、15.4%)の順となっています(図2)。

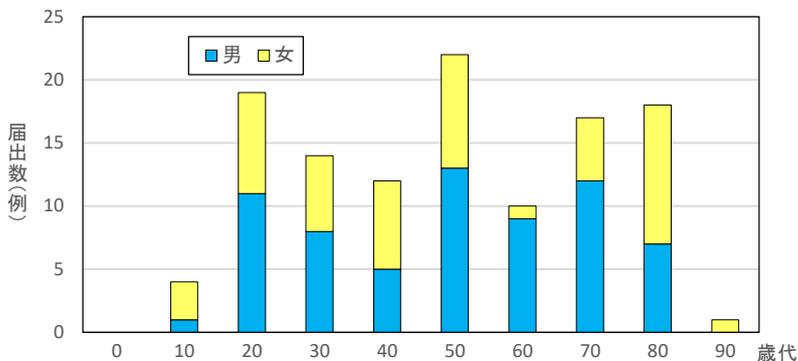


図2 性別・年代別(2024年第1週-第38週 n=117)

2019年第1週から2024年第38週まで831例の届出があり、病型は肺結核(その他を含む)が402例(48.4%)、無症状病原体保有者が295例(35.5%)、その他の結核が133例(16.0%)、疑似症患者が1例(0.1%)となっています。

2019年から2023年までの各年の届出数(疑似症患者を除く)に対する無症状病原体保有者の占める割合は、やや増加傾向(2019年:54例32.3%、2023年:41例35.3%)となっています。2024年第38週時点の病型が占める割合は、肺結核(含その他)が47例(40.2%)、その他の結核が13例(11.1%)、無症状病原体保有者が57例(48.7%)となっています(図3)。

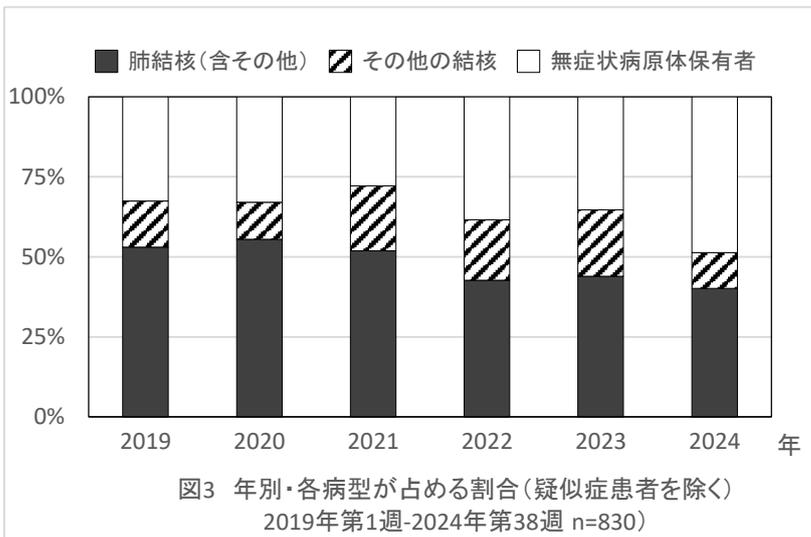


図3 年別・各病型が占める割合(疑似症患者を除く) 2019年第1週-2024年第38週 n=830

各年の肺結核(含その他)患者の届出数に対する年代別の占める割合は、60歳代以上が2019年(88例中49例、55.7%)から2023年(51例中41例、80.4%)まで増加傾向となっていました。一方、20歳代の占める割合は、2020年(86例中5例、3.5%)から2023年(51例中4例、7.8%)まで増加傾向となっており、2024年(第38週現在:47例中7例、14.9%)は更に増加しています(図4)。各年の無症状病原体保有者の届出数に対する年代別の占める割合は、40歳代未満の占める割合が、2019年(54例中19例、35.2%)から2022年(55例中14例、25.5%)まで減少していましたが、2023年(41例中12例、29.3%)、2024年(第38週現在:457例中24例、42.1%)と増加しています(図5)。

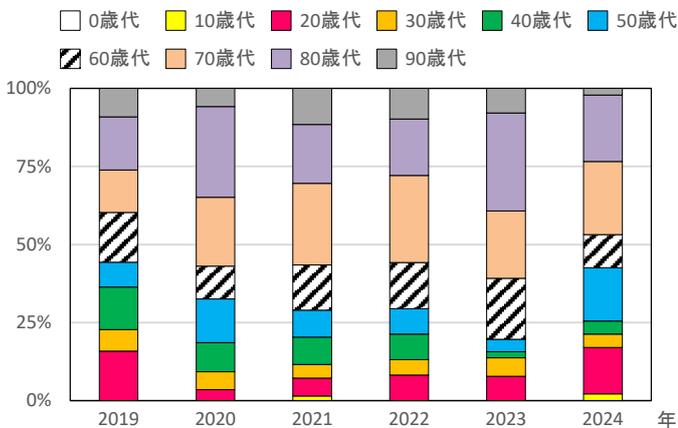


図4 肺結核患者(含その他)における年代別分布 2019年第1週-2024年第38週 n=402

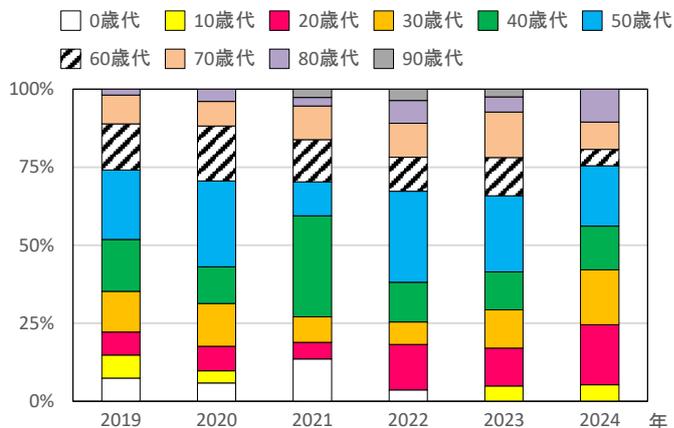


図5 無症状病原体保有者における年代別分布 2019年第1週-2024年第38週 n=295

厚生労働省は、新規結核患者は高齢者に多く、およそ7割が60歳以上となっている一方で、若年の外国生まれの患者の割合が増加しており、20-29歳の新規患者の8割以上を占めていることを指摘しています。

結核の症状は、長引く咳、たん、微熱、体のだるさなどが挙げられますが、特徴的なものがなく、初期には目立たないため、特に高齢者では気づかないうちに進行してしまうことがあります。結核を発症しても、早期に発見できれば重症化を防げるだけでなく、大切な家族や友人等への感染拡大を防ぐことができることから、早期受診・早期診断が重要となります。

また、今般、新型コロナウイルス感染症をはじめとした呼吸器感染症の脅威が再認識されています。呼吸器感染症が例年流行する秋・冬前だからこそ、マスク着用を含む咳エチケット、手洗い・手指消毒、換気など基本的な感染対策を心がけましょう。